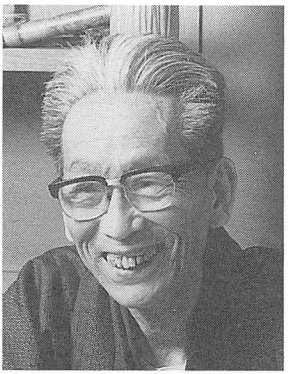
丸山博先生を偲ぶ

中川米造

丸山博先生が一九九六年一月一〇日、老衰（多臓器不全）によって永眠された。一九〇九年生まれなので享年八七歳である。お生まれは広島市であるが、父祖の地ということではなく、お父君が土木技師であったため、たまたまその地に勤務されていたというだけのようで、その後もお父君にしたがって言葉も生活習慣もまるで違う各地を転々と移り住まれたようである。とうぜん、どこでも異人種あつかいでいじめの対象になる。身体もあまり健康ではなかったようで、そうなると内面には反骨精神を育てながら、精神世界に楽しみをみつけるようになる。静岡高校を終えると、上智大学の哲学科にはいられたというのも理解できる。



故丸山博先生

しかし一年後に急に方向転換して、そのころ帝国大学となった大阪大学に入学された。なぜこの方向転換なのか。御兄弟は六人あったのが、三人とも夭折され、博先生も病身であったことが一つの理由になったのかもしれない。兄弟がつぎつぎと亡くなったときのご両親の悲しみを感じたことが、後に乳児死亡の研究の動機になったとも述懐されている。

阪大に入学したのは一九三一年。満州事変がおこった年であり、農村窮乏は極度に深刻化し、日本が急速に軍国主義化しようとしていた時期である。これ

に対して社会主義的な思想運動も大きな高まりを見せていた。医学部の授業については、それほど興味はそそられなかったようである。むしろ目標はカリキュラムにはない東洋医学にあり、その道の名医の誉れが高かった渡辺松園、清川玄道の二人に師事していた。ただ一つの例外はフランス留学帰りの少壮衛生学者梶原三郎教授で、その博学と医学と社会との関連や生物学や物理化学とを縦横に結び付けての講義に魅せられたのが、衛生学を志すのに影響があったようである。

衛生学者としての専門領域は衛生統計学であり、なかんずく乳児死亡統計である。それも、事例研究と平行しての研究であり、なによりも調査される側の視点にたっての研究であったところに特徴がある。手法としては、個人でこつこつやるというよりは、集団でとりくむというやりかたで、当時養成がはじまっていた保健婦の教育や実践をかねて家庭訪問をさせて事例検討をやっている。これは五五年夏、西日本でおこった森永ヒ素ミルク中毒を一四年後に追跡調査をおこなって問題を再認識させる契機にした研究においても同じ手法によっている。

医学史に関する関心は医学生時代からあったようで、学生たちで「社会医学の実践と探究およびアカデミーの確立」を目的として組織したアルファー会の活動の中に医学史研究部門をもうけて、文章を発表したりしていた。また戦後厚生省の技官であったときに、いちはやく歴史的にその意義を位置づけた『公衆衛生』（一九五〇）を執筆発表して、関係者にひろく読まれ、力づけた。つまりそれだけの蓄積があったということである。

五八年大阪大学の衛生学の教授に就任したが、二年後医学史研究会を組織し、社会的および現代的な視点からの医学史研究の拠点となった。その一つの成果は日本科学史学会編の『日本科学技術史医学編1、2』であろう。先生自身の医学史への関心としては、一連の森鷗外研究があげられる。軍医あるいは医学者としての鷗外を研究することで、日本医学の底流にある軍事的性格を明らかにするためであった。

もう一つはインド医学アーユルベーダ研究で、これは周囲におるものとして、やや違和感をもったものである。しか

し、今日日本でも、そうした方面への関心が高くなっているのをみると、ここでも先見の目があったことを思い知るのである。

重要な論文は『丸山博著作集』（農文協、三巻）に自伝や著作目録まできちんとまとめて、旅立たれた。ほんとうの大往生であったと聞く。